

第1回 国際協力セミナー 報告

農村開発プロジェクトの実際を聞いてみよう！

講師：成澤博氏 （元 NGO 緑のサヘルスタッフ、元 JICA チャド派遣 農村開発専門家）

第一回の国際協力セミナーは、「農村開発プロジェクトの実際を聞いてみよう！」と題し、東京農業大学卒業後、NGO「緑のサヘル」に8年間在籍され、その後2005年3月より1年間、JICAの技術協力専門家としてチャド国での難民キャンプ周辺住民支援プロジェクトで活躍されました成澤博さんに、国際協力機構（JICA）での活動報告を中心にお話を伺いました。当専攻からは20人が参加し、活発な質疑応答がなされました。会後はラウンジにて講師との親睦を深めました。



【日時】2006年5月29日 月曜日 16:30ー

【参加者】M1:10人、M2:5人、D他:2人

【議事】

JICA 技術協力専門家としての活動報告

チャド国は、アフリカ中部、スーダンの西側に位置する国です。JICAにおけるプロジェクトは、「チャド東部スーダン難民キャンプ周辺コミュニティ緊急対応支援」と呼ばれ、ダルフル紛争によって発生しチャドへ流入している難民と、その周辺地域住民との間の緊張を緩和し、地域の社会安定に貢献することを目標として実施されました。プロジェクトは、雨季にサイトへの交通が途絶えてしまうため、雨季前支援と雨季後支援に分けられます。雨季前と雨季後でプロジェクトの内容は大きく異なりますが、どちらも緊急性を重視した、住民の目に見えるかたちでの短期対応可能な支援が検討されました。

雨季前支援においては、まず現地ですでに活動している先行団体との活動重複を避けるため調査が行われました。その後先行団体のひとつであるドイツ技術公社（GTZ）の PRODABO と呼ばれるプログラムによる住民組織を利用し、その中で JICA が支援可能なものについて活動を行うという形で支援が進められました。今回の支援では、住民の事業参加を条件として共同の貯蔵庫を作り、なおかつ住民組織のメリットを確認するためのワークショップ、管理に関する講習会、管理委員会に対するフォローアップなどを開催しました。住民の建設段階から運営段階の参加により、さまざまな面で住民によるオーナーシップが醸成されたと言えます。今後は、管理委員会の運営が鍵となりますが、JICAによる支援は期間が限られているため、現地の農村開発公社にフォローをバトンタッチし住民によるさらなる自立が期待されます。

雨季後支援では、ゼロインプット（何も持ち込まず現地にある廉価な材料で）をスローガンに、家庭における簡易な改良貯蔵庫のデザインを行いました。実際にこのデザインの倉庫が作られることはなかった

ものの、影響を受けた住民のイニシアチブにより村落共同倉庫が建設されました。この点で持続性、自立発展性が評価できる、またゼロインプットが達成されていると言えます。

支援活動に感じた点としては、事前調査段階で国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）による団体への活動調整があったならもう少しスムーズに調査ができたのではと、コーディネーション不足があげられます。また JICA の特徴でもあるのですが、職員のセキュリティを重視するためサイトに泊り込んで調査をすることができないことから状況把握が難しく、住民の本音が聞けなかったことを残念に思います。

【質疑応答】

- JICA の日本チームはどういった構成か？
ー農村開発専門家 1 人（成澤さん）と安全管理専門家 2 人
- 支援には地域住民の信頼が必要不可欠だと思うが、意識していたのか？
ー必要と感じたが時間的に無理だった。そういう意味では意識していない。ただ積極的に現場に行き顔を見せるという努力はしていた。
- JICA に対して NGO だと支援に対する小回りがきく？
ーYes. サイトに泊まって活動可能。自由度が高い。
- 東京の本部との意思疎通は大変か？
ーYes. 週一回レポートを提出していたが反応が薄かった。コミュニケーションが少ないと感じた。
- チャドはイスラム教徒が 50% を占める国だが、そういった国で女性が支援活動を行う ことができるのか？
ー逆に男性から女性に対してアプローチを行うことは難しい。男女それぞれにメリット、デメリットがあり、PRODABO では、男女ペアで活動を行っていた。などなど



なお、成澤さんの活躍の様子は、こちらで読むことができます↓

<http://www.jica.go.jp/jicapark/monthly/0601/01.html>

【参加者の感想】

- 実際に現場でやったことを聞くと、やはり迫力があり、いい刺激になった。今後自分がフィールドに入ったとき、まず信頼を得ることが重要だと考えていたが、やはり先行して入っている組織とコミュニケーションをとり、その組織がすでに得ている信頼に便乗するという方法が効率的で、現実的だと感じた。（M1）
- 成澤さんのキャリアに対する考え方や経験、その他質疑はリアリティがあり、非常に参考になった。（M1）
- プロジェクトについてよく理解できたが、苦労話や国際協力に携わる身としての話が、もう少し聞ければよかった。（M2）
- 難民問題それ自体だけではなく、その周辺への支援の必要性も、同じく大事であることに気づかされた。（M1）

- 現場の貴重な話を聞くことができ、授業とは違ういい勉強になった。(M1)
- 「発展途上国に対する支援」に大きな関心があったというわけではなく、漠然とした興味を持っていたのだが、興味深かった。「信頼の醸成」をキーに質問させてもらったが、信頼を築くには時間が必要だということはわかっていたにもかかわらず、やはり実地では信頼第一！なんていう悠長なことは言ってもらえないのかな？と思った。お話を聞いて、国際協力の現実と理想のギャップを改めて実感した。(M1)
- 現場での流れやプロジェクトの選択方法など、知らないことばかりでとても興味深かった。また成澤さんの国際協力人生もうかがえてうれしかった。これからもぜひぜひがんばって欲しいと思う。(M1)
- スーダン、ダルフル危機については知ってはいたが、難民と周辺コミュニティとの緊張についての問題には意識が向いていなかったのも、自分にとっては新鮮で、必要性を感じる話題だった。(M1)
- やっぱり具体的なお話でとても参考になった。①「住民組織」「信頼」といった普段の学問の世界で言っていることが、どういうことなのか、垣間見ることができた。②現場での「ぶっちゃけ」話など、おもしろかった。やっぱりいいですね、現場。。(M2)
- 実際にプロジェクトが行われていく過程・苦労話を聞くことができ、大変興味深い機会となった。(M1)
- 普段聞けない実務の方の話が聞ける会は大事。すぐ頭でっかちになりがちな院生が、現場の声を聞くのは、とても有意義(M2)
- ためになった。
- 教員や他研究室の先輩と受講することで、自分には足りない視点からの問いを共有できることが、すごく為になった。(M1)

成澤さん、どうもありがとうございました！

議事録担当：清水敬祐、太田美帆